

上級コース「日本語 7」におけるディベートと作文教育

数野 恵理

1. はじめに

本稿は 2013 年度秋学期に ICU 日本語教育課程 (以下、JLP)「日本語 7」のコースで行ったディベートと作文に関する実践報告である。

JLP では「上級日本語 1 読解」「上級日本語 1 話し方」「上級日本語 1 聴解」「上級日本語 1 書き方」という 4 技能が独立した 4 つのコースがあったが、教育効果を高めるため 2009 年度より「読解」「話し方」の 2 コース、「聴解」「書き方」の 2 コースは同じ学期に履修するよう学生に強く勧め、それぞれのコースで同じテーマを扱い連携させるようになった。その後、カリキュラム改革により、2012 年度秋学期に「上級日本語 1」の 4 コースは 4 技能を統合した「日本語 7」「日本語 8」という二つのレベルのコースに生まれ変わった。

筆者が 2009 年度に担当した「上級日本語 1 書き方」のコースには論拠を示しながら論理的に文章を書くことを苦手とする学生が複数いたため、数野 (2011) では書き方だけでなく話し方のコースでもアカデミックな力を養っていく必要があることを指摘した。

その後、2011 年度に「上級日本語 1 読解」と「上級日本語 1 話し方」を連携させたコースを担当することになったので、アカデミックな力を養成するために、原子力発電に関する複数の読み物を読んだ上でディベートをするという活動を行い、その活動について学生にアンケート調査を実施した (数野 2013)。学生へのアンケートの結果とディベートでの発言内容から、論理的・批判的思考力のようなアカデミックな力や日本語力を身につけていく上でディベートが効果的であることが示された。また、ディベートは学生のニーズと合っており、日本語学習の動機付けにもなっていることが学生のアンケート結果から明らかとなった。さらに、事前に日本語で資料を読んだり話したりしてテーマへの理解を深めておいたことにより、ディベートでの議論が深まるということも観察された。

2011 年度の話し方のコースでディベートを行った背景には、書き方のコースだけでなく話し方のコースでもアカデミックな力を養成する必要があるということがあった。ディベートと同じテーマで作文を書くことができれば内容も深まるだろうと考えたが、2011 年度までは「上級日本語 1 読解」「上級日本語 1 話し方」を履修している学生が同じ学期に「上級日本語 1 聴解」「上級日本語 1 書き方」を履修するわけではなかったため、一つのコースでディベートと作文を関連付けて指導することはできなかった。

しかし、2012 年度秋学期に 4 技能を統合した「日本語 7」「日本語 8」というクラスができたことにより、ディベート活動を作文につなげ、アカデミックな日本語力を伸ばしていくことが可能となった。また、ディベートと作文の前には読解と聴解の授業でテーマについて学び、目と耳からインプットすることで新しい表現の定着を強化することも可能となった。

そこで、2012 年度秋学期より「日本語 7」では学期の終わりに読解と聴解の授業で原

子力発電について学び、最後にそのテーマでディベートをして作文を書くという活動を取り入れた。以下では 2013 年度秋学期の「日本語 7」で行ったディベートと作文の活動について報告する。

2. 2013 年度秋学期の「日本語 7」で行ったディベートと作文

2-1. コース前半のディベートと作文

2013 年度秋学期の「日本語 7」では、まずコースの前半に一度ディベートとそれに関連した作文の練習をした。そして学期末には、読解と聴解の授業で原子力発電について学び、期末試験の一環として原子力発電に関するディベートと作文を課した。

1 回目のディベートはディベートの形式に慣れるという目的もあるので、読解や聴解の授業とは関連づけずに、身近で話しやすいテーマを選び、論題は「小学生にスマートフォンを持たせるべきではない」とした。数野（2013）で報告した手順で、前の週にディベートの目標や方法、ディベートでよく使われる表現を紹介し、グループに分かれてブレインストーミングなどをして準備をする時間を設け、翌週ディベートを行った。2013 年度秋学期の「日本語 7」は 2 名でチームティーチングをしており、1 回目のディベートは話し方の授業を受け持っている教員が担当した。

各学生にディベートのフィードバックが返却されたあと、書き方の授業で賛成・反対意見を述べる作文を書かせた。ディベートは決められた立場で意見を述べなくてはならないが、作文では自由に自分の意見を書くことができるようにした。その際、以下の教材を配付し、パソコンでタイプして 1 時間で書いて提出するよう伝えた。ただし、書き終わることができない場合はその日のうちに出せばよいことにした。また、これは試験ではないので辞書を使ったりメモを見たりしてもよいことにした。なお、この作文を書くまでに書き方の授業では書き言葉、事実文・意見文、引用の仕方などを指導し、読解や聴解のクラスで扱ったものを引用しながら 3 つの作文を書いている。そのうち 2 つは手書きで書いたが、今回は授業時間内に書いて提出させるために、パソコンでタイプさせた。

【作文】「小学生にスマートフォンを持たせるべきではない」という意見に賛成か、反対かを述べなさい。以下の段落構成^{こうせい}で書くこと。

- ① 主張
- ② 根拠 1
- ③ 根拠 2
- ④ 予想される反対意見への反論
- ⑤ まとめ

まず①～⑤の段落の中心文 (Topic sentence) を書いてから、詳しい内容を書くこと。
④を書くときは、以下の表現のどちらかを使うこと。

予想される反対意見への反論を述べる時の表現

1. ～という意見もあるが、・・・。
2. 確かにーには～という【利点／長所／メリット⇔問題(点)／短所／デメリット】もある。しかし、・・・。

ディベートのために準備した内容であったため、大部分の学生が説得力のある論拠を示して賛成・反対意見を述べる事ができた。内容・構成ではほとんど問題がなく、観察されたのは以下の問題だけであった。

まず、第4段落「予想される反対意見への反論」という部分で、反対意見をいくつも紹介して、それに対して十分に反論していない学生が一名いた。その学生には単に自分と異なる意見を紹介するだけでは説得力がなくなってしまうので、自分と異なる立場の意見をひとつ紹介してその意見に対してしっかり反論するよう指導した。

また、スマートフォンの普及率に関してデータを引用して書いた学生で、そのデータの読み取りが間違っている学生がいた。日本語で調べて論拠を示そうとしたのはよかったが、今後レポートや論文を書くときに、データの見方を間違えて事実と異なることを論拠として用いてしまうのは大きな問題であるので、その点を指導した。

2009年度に担当していた書き方のコースでは日本語の指導をしたくても、内容や構成などに問題がある学生が多かったため、その指導に時間がかかり、日本語の表現に関する指導に思うように時間を使うことができなかった。しかし、今回は事前にディベートをしていたこともあり、上述の2名以外、内容や構成に問題がなく、個別指導の時間には日本語に焦点を当ててフィードバックをすることができた。

数野(2013)で指摘したように、ディベート活動はグループでの話し合いを通じて説得力のある論拠は何か、どの順序で話すと効果的かなどを学ぶことができる。この作文では決められた立場からではなく自分の意見を書くことになっていたのも、ディベートで話したことをそのまま書くわけではないが、作文を書くときにディベートでの議論を生かして、説得力のある文章が書けた。上級といってもまだまだ日本語自体の指導が必要なレベルなので、個別指導を内容・構成ではなく日本語の指導に充てられたのは大きい。

2-2. 学期末のディベートと作文

「日本語7」の期末試験には「漢字語彙」、「表現文型」、「読解」、「聴解」、「話す」、「書く」があるが、そのうち「話す」はディベート、「書く」は作文とし、教員2名で評価をした。ディベートは「日本は10年後の2022年までに脱原発をすべきである(2022年以降、日本は原子力発電所を稼働すべきでない)」という論題で実施し、作文は同じテーマで賛成・反対の意見文を書かせた。

ディベートと作文の準備として、読解と聴解の授業では原子力発電を取り上げ、新し

い語彙を学ぶとともに、原子力発電について学んだ。以下が原子力発電をテーマとした授業と試験のスケジュールである。

10月21日(月)	【話し合い】さまざまな発電方法 ・原子力発電、火力発電、風力発電、太陽光発電、地熱発電の利点と問題点について調べてきて話し合う
10月23日(水)	【読解】原子力発電に関する討論
10月28日(月)	【聴解】廃炉に関するラジオ番組
10月30日(水)	【読解】脱原発に反対の立場
11月6日(水)	【読解】脱原発を支持する立場
11月6日(水)	ディベートの説明と準備
11月8日(金)	期末試験【作文】
11月15日(金)	期末試験【読解】脱原発を支持する立場
11月18日(月)	期末試験【話す】(ディベート)

スケジュールの関係で期末試験の作文はディベートの前に行うことになったが、ディベートの準備をする授業は作文試験の前に済ませた。なお、学生には作文の試験は原子力発電に関してパソコンでタイプするということだけ事前に伝え、具体的な内容は試験当日に知らせた。以下が作文の期末試験の内容である。

<p>ICU JLP 日本語7 期末試験 作文 (50分)</p> <p>・9月に関西電力の大飯原子力発電所3、4号機が定期検査<small>おおい</small>に入って運転が停止したので、現在国内で稼働している原発はないが、今後日本は原発を再稼働すべきか。 根拠<small>こんきょ</small>を述べて、あなたの意見を書きなさい (600～800字)。</p> <p>・あなたとは逆の立場の主張に対して、反論もすること。</p> <p>・最後にまとめの文をきちんと書くこと。</p>
--

「9月に関西電力の大飯原子力発電所3、4号機が定期検査に入って運転が停止したので、現在国内で稼働している原発はない」という情報は読解の授業で扱った内容である。

大半の学生は論拠を示して説得力のある作文を書くことができたが、「あなたとは逆の立場の主張に対して、反論もする」という課題をうまくこなせない学生がいた。コース前半の授業では特に問題にならなかったが、それは配付されたプリントの表現を見ながら書いていたためだったようだ。期末試験の結果からは、譲歩の表現の用法を正確に理解していない学生がいることが明らかになった。

一般的に、「A。しかし、B」「Aが、B」というような譲歩の表現を用いる場合、自分が強く言いたいことはBに書く必要がある。つまり、譲歩の表現を用いて自分とは逆の立場の主張に対して反論する際は、Aの部分で自分とは逆の立場を紹介して、Bに自分の意見を書かなければならない。ところが、まずAに自分の主張を書いてから、Bに逆の立場の主張を書く学生がいた。

読み手は「しかし」「～が、・・・」という譲歩の表現を見ることにより次に大切な意見が来ると予測する。読み手は「今まで A が書き手の意見だと思っていたが、『しかし』と言っているということは、書き手の言いたいことは A ではなく B だったのか。私の読み方が間違っていたようだ。」と解釈し直さなければならなくなり、混乱する。そしてさらに読み進めると、再び「しかし」「それはそうだが」というような譲歩の表現が出てきて、読み手はますます混乱することになる。

つまり、「A。しかし、B。それはそうだが、C。」というような文章の型を用いて、まず A に自分の主張を書いたあとで、「しかし」などを用いて B に逆の立場の主張を書き、さらにもう一度「～が、・・・」などを用いて自分の主張を書いてしまうと、読み手は何度も読み方を修正しなければならなくなり、混乱し、何が言いたいのかわからなくなってしまうのである。

期末試験は結果を見に来ない学生もいるが、幸い譲歩の表現に問題のあった 2 名の学生は試験のあとで結果を見に来たので、この点について指導することができた。

今後は譲歩の表現について、不適切な用法も示して学期中に詳しく指導していく必要がある。また、逆の立場の意見を紹介してそれに反論する形で意見を述べるという型の文章は読解の読み物にも出てくるので、読解の授業では読むためのストラテジーを教えるとともに、書くためのストラテジーも指導していきたい。

期末試験のディベートは数野 (2013) の報告と同様に行った。ただし、2011 年度のディベートで問題のあった点については、「グループで分担して話しているとき、自分の話が終わっても自分のグループの話が終わっていないければ『以上です』と言わない」「反駁の際に『たぶん問題ない』『大丈夫かもしれない』というような曖昧なことを言わない」と指導したので、今回そのような問題は見られなかった。

3. おわりに

2012 年度秋学期に「上級日本語 1」の技能別 4 コースが「日本語 7」、「日本語 8」に移行したことで、以前は話し方コースと書き方コースで別々に行っていたディベートと作文の指導を関連付け、一つのコースで行うことができるようになった。また、準備段階では、読解と聴解の授業を通して、日本語でそのテーマについて学び、理解を深めることも可能になった。総合的な活動を通して議論が深まり、論理的・批判的思考力といったアカデミックな力が養われるため、ディベートや作文に対するフィードバックでは、以前よりも日本語自体の指導に時間を使えるようになった。

「日本語 7」ではインタビュープロジェクトなど、個人が関心のあるテーマを選んでインタビューを行い、発表をしたりレポートを書いたりするという活動も並行して行っているが、本稿で報告したように全員で同じテーマについて読んだり聞いたりしたあとでディベートをしたり作文を書いたりする活動は議論が深まり、アカデミックな日本語力の養成のために欠かせない。今後もバランスを考えながら、個人でテーマを選ぶものと全員でひとつのテーマについて学ぶものを取り入れてコースをデザインしていくとよいだろう。

最後に、読むためのストラテジーと書くためのストラテジーの連携を今後の課題とし

て挙げたい。2013 年秋学期の「日本語 7」では学期中に作文で自分とは異なる立場の意見を紹介してそれに反論するという練習をしていたが、期末試験では譲歩の表現の使い方を十分に理解していない学生がいることがわかった。読解の授業とも関連付け、譲歩の仕方、意見の述べ方を指導していくことが今後の課題である。

謝辞

「日本語 7」のコースでチームティーチングをしてコースのために有意義な提案やコメントをくださった杉浦由紀子先生に感謝申し上げます。

参考文献

- 数野恵理 (2011) 「上級日本語 1 聴解と書き方コースの実践報告」『ICU 日本語教育研究』7, 87-98
- 数野恵理 (2013) 「アカデミックな力を養成するためのディベート活動の試み」『ICU 日本語教育研究』9, 75-85